

ピアノ初心者に対する効果的な伴奏法指導

——教育実習に役立つ实际的指導のための一考察——

小笠原 真也

Effective Accompaniment Method Guidance to Piano Beginners

——Consideration for Useful, for Practice Teaching Practical Guidance——

Shinya OGASAWARA

Key words : 伴奏法 Accompaniment method, 伴奏付け Accompaniment putting,
教育実習 Practice teaching

I 緒 言

I-1 広島文化短期大学音楽学科の現状

広島文化短期大学音楽学科では、社会情勢変化と共に多様化する学習者ニーズに応えるべく、従来の音楽専門技術者養成を単独の目的とする教育に、個人の異なる学習目的の希望を尊重し、それに応える音楽教育を通して社会参加への意欲を喚起し、生きる力を育てるとする目的を加え、この二つの目標を「音楽教育・二つの途」と表現し新たな教育方針としている。

この新たな教育目標設定により、平成15年には、文部科学省が推奨する、地域総合科学科適格認定を財団法人短期大学基準協会より受け、平成16年度よりその実施を開始し現在に至っている。地域総合科学科とは実際の個々の学科の名称ではなく、従来の学科のように内容を特定分野に限定せず、地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的とした新しいタイプの学科の総称であり、その特色としては、①多彩な科目、②柔軟な科目選択、③多様な履修形態、④社会人の積極的な受入れ、⑤第三者機関による適格認定、以上5点が挙げられる。

広島文化短期大学音楽学科においては、その名称が示すように分野は音楽に限定されるが、特定の分野内での多彩な科目設定、柔軟な科目選択、多様な履修形態によって、地域の多様なニーズに応えている。

I-2 学生の音楽的能力

「音楽教育・二つの途」という新たな教育目標設定、また地域総合科学科の実施は、入学者の音楽的能力の著しい多様化をもたらした。その結果、場合によっては、大学入学以前にピアノレッスンを経験しないという入学者も存在する状態となっている。つまり、従来であれば音楽大学入学のために多少なりともピアノの訓練を経ているはず、という固定観念が通用しない状況となっている。

試みに、平成18年度入学生のうち、簡易伴奏法（平成18年度後期開講科目、教職履修者、音楽療法士資格取得希望者必修）受講者48名のピアノ経験についてアンケート調査を実施した。

有効回答数43のうち、大学入学以前におけるピアノ未経験者が8名、大学入学のためにピアノレッスンを開始した者が5名、計13名がピアノ未経験、もしくはほとんど未経験という結果となった。

またこのうちピアノ実技に対して19名が「難しい」、11名が「非常に難しい」と回答し、有効回答数43のうち30名がピアノ実技に対して困難を感じているという結果となった。

更には伴奏付けに対し、9名が「良く練習すればなんとかできる」、1名が「思うようにできない」、3名が「どうしたらよいかまったくわからない」と回答し、有効回答数43のうち13名が、伴奏付けに対して非常な

困難や不安を抱えていることが明らかとなった。

このように多様化した学生の学習目的の希望を尊重するために、どのようなレベルの学生であっても、希望すれば教職を履修できる体制をとっているため、いわゆるピアノ初心者の学生が教育実習において最低限の歌唱指導を行えるよう、適切かつ効果的な伴奏法の指導が、従来とは違った観点から捉え直されなければならないと考える。

短期大学における教職履修者は、中学校教諭二種免許状（音楽）取得をめざし、2年次6月乃至9月に3週間の教育実習を経験する。実習先中学校の事情にもよるが、実習において歌唱指導を行う場合には必ずピアノ伴奏を受け持つ必要がある。そのため大学における勉強をピアノ初心者としてスタートした学生にとっては、伴奏法（広島文化短期大学音楽学科においては簡易伴奏法）において、歌唱指導のための実際的かつ適切な方法を勉強することは、実習の成否にかかわるのみならず、その後の学生生活、ひいては社会に出て後の学生自身にとって、かけがえのない経験となる。この小論においては、そのための効果的な指導法を考察する。

Ⅱ 方 法

Ⅱ－Ⅰ 指導内容の限定その1

指導内容

初めに指摘しておくべきことは、以下に述べる方法はあくまでピアノ初心者が、限られた時間の中で教育実習における歌唱指導について、効果的に勉強するための方法を考察したものであるということである。つまり、本来は時間をかけてピアノ演奏技術や和声学の知識等を総合的に勉強し、実践して身に付けるべきことを、短期集中である程度のレベルにまで到達させるためには、どのような指導が効果的であるかを考察するものである。従って以下の方法で学習した後、時間的に余裕を持って総合的な勉強をすることによって、既習の学習内容がより良く把握でき、さらに伴奏付け

の能力が向上することとなる。

また、ここで試みられる方法は、歌唱指導用教材を最終的に、旋律を右手で演奏し、左手で任意の伴奏をつけられるようにすることを目標とするものである。もちろんどのようなレベルにあらうとも、まずは教材につけられている伴奏部を適切に演奏できるようになることが望ましいが、教材に掲載されている楽譜をただ単に正確に演奏できるようになるだけでは、歌唱指導として十分とは考えられない。なぜならば、中学校において実際に音楽の授業を受ける生徒たちの中には、読譜力の劣っている者もいるであろうし、「学習の遅れがちな生徒、心身に障害のある生徒などについては、生徒の実態に即した指導を行う」¹⁾ 必要があるため、また生徒が「フレーズの味わいを感じ取って表現すること」²⁾ ができ、「言葉や旋律の抑揚にふさわしい歌い方を工夫させ」³⁾ ることができるようにするためには、指導の最初に教材の旋律を、生徒たちに印象付ける必要があると思われるからである。そのためには、まず歌唱指導用教材の旋律を右手で演奏し、生徒たちに旋律の抑揚を印象付け、同時に左手でわかりやすい伴奏を施すことで、楽曲全体を生徒たちに把握させる。以上のような方法によって、効果的な歌唱指導が期待される。

Ⅱ－Ⅰ 指導内容の限定その2

履修学生の音楽的能力

教職を履修する学生の音楽的能力にはかなりの個人差があり、一概に論ずることは不可能である。ここでは特に、ピアノ初心者のための効果的な学習方法を考察する。ここでいうピアノ初心者とは、ピアノ未経験者及び大学入学のためにピアノレッスンを開始した者で、大学入学後にピアノ実技を履修し、右手で旋律を、左手でヘ音記号を含む伴奏を演奏することができ、両手である程度異なった内容を処理することができる者、具体的にはバイエル54番程度の教材を演奏する能力を持つ者と仮定して論を進める。（譜例1）

Comodo

54.

★（低音部記号を見落さないように。）

譜例1 バイエル54番

ここで重要なことは、伴奏法授業担当者と、学生のピアノ実技レッスン担当者との連携である。ピアノ初心者にとっては、歌唱指導に用いる教材の旋律のみを演奏することさえ困難であることもめずらしいことではないため、ピアノ実技に関する詳細までを授業時間内に達成することは事実上不可能であるためである。特にピアノ初心者にとっては、伴奏法授業担当者とピアノ実技レッスン担当者との緊密な連携によって、さらなる学習効果の向上が期待される。幸い広島文化短期大学音楽学科においては、ピアノ実技試験曲目を自由曲として設定しているため、学習者が希望すれば、歌唱指導用教材の伴奏部分をもってピアノ実技試験を受験することも可能であり、ピアノ実技レッスンの時間内に実技担当者より歌唱指導用教材の伴奏部分についての指導を受けることもできる体制をとっている。

Ⅱ－２ 具体的指導内容その１

カデンツの反復練習

ピアノ初心者の場合、普段主に木管楽器、金管楽器等の旋律楽器や声楽を勉強していることがほとんどであるため、和声に対する感覚の欠如、もしくはほとんど持たない事例が多く見られる。そのため、第１に和声に対する感覚を醸成すること、第２に楽曲構造の把握につながるようフレーズの終止感を養うこと、以上

２点を目的として徹底したカデンツ（終止形）の反復練習を学生に課する。

使用する和音進行は、その練習に際して学生が困難を感じることはないようできる限りの配慮をし、まずはⅠ－Ⅴ－Ⅰ（Ｔ－Ｄ－Ｔ）、及びⅠ－Ⅳ－Ⅰ（Ｔ－Ｓ－Ｔ）の２種類に限定する。比較的進んだ学生やある程度理解したと考えられる学生に対してはⅠ－Ⅳ－Ⅴ－Ⅰ（Ｔ－Ｓ－Ｄ－Ｔ）の段階まで練習させる。また第３の目的として、両手で別々の動きを表現することを自然に体得させるため、カデンツ進行は左手のみとし、右手はその進行に合致した動きを考えさせる。「メロディはいろいろ細かい動きがあるので、メロディと和音を兼ねて弾くというのは非常に弾き難いことであり、この点でも従来の和声学がピアノでは非実用的である。たとえばソナチネアルバム、ソナタアルバム等の曲を見ると、その大部分が、右手旋律、左手和音（分散和音）の形で出来ていることがわかる。」⁴⁾

なお左手カデンツの進行は開始を基本位置とするが、すべての和音を基本位置で連続させると演奏困難なばかりか、伴奏としても不安定である。「左手の和音の最低音はあまり動かないほうがよく、その他の音も、なるべく旋律的に自然に動いた方がよい。」⁵⁾ そのため、旋律に施される伴奏の和音によっては、経過的に第１転回形や第２転回形も使用される。（譜例２～３）

The image displays three musical staves, each representing a different cadence pattern. Each staff consists of a treble clef and a bass clef. The right hand (treble clef) plays a simple melody, while the left hand (bass clef) plays chords. The first staff shows a sequence of chords labeled I, v¹, and I. The second staff shows I, IV², and I. The third staff shows I, IV², v¹, and I. The right hand plays a simple melody, and the left hand plays chords.

譜例２ （ハ長調のサンプル、右手の動きについてはあくまで参考として例示）



I V¹ I

I IV² I

I IV² V¹ I

譜例 3 (イ短調のサンプル, 右手の動きについてはあくまで参考として例示)

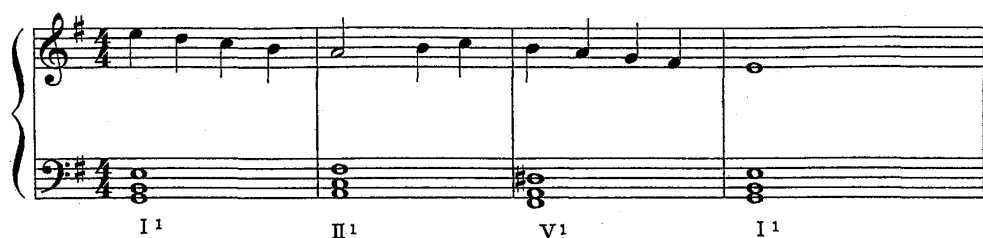


I V¹₇ I

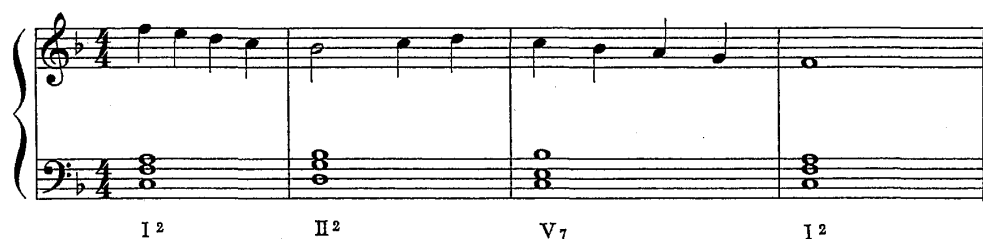
I IV² I

I IV² V¹₇ I

譜例 4 (ト長調のサンプル, 右手の動きについてはあくまで参考として例示)



譜例 5 (開始位置第 1 転回形, ホ短調の場合, 右手の動きについてはあくまで参考として例示)



譜例 6 (開始位置第 2 転回形, ヘ長調の場合, 右手の動きについてはあくまで参考として例示)



譜例 7 (開始位置第 2 転回形, ニ短調の場合, 右手の動きについてはあくまで参考として例示)

このカデンツ反復練習は、当然全調性にわたって行われるべきものであるが、ピアノ初心者を比較的多く含むであろう学生の音楽的能力を考慮した場合、実際には不可能である。そこで、中学校の音楽授業で標準的に使用されている、教育芸術社出版の「中学校の音楽 1」「中学校の音楽 2・3 上」「中学校の音楽 2・3 下」に掲載されている中の、歌唱指導を行う必要が生ずるとされる主な教材の調性をもとに、調号 3 つまでの長・短両調（ハ長調、イ短調、ト長調、ホ短調、ヘ長調、ニ短調、ニ長調、ロ短調、変ロ長調、ト短調、イ長調、嬰ヘ短調、変ホ長調、ハ短調）を反復練習の対象とする。

学生がある程度慣れてきた後、属和音ドミナントを属 7 和音にすることも学ばせる^{注)}。(譜例 4)

注) 属 7 和音における第 5 音を省略するか否かは、学生の能力に応じて適宜考慮されるべきである。

また余裕のある学生には、下属和音サブドミナントを IV から II にすることも学ばせ、サブドミナントに IV の和音を使用した場合と II の和音を使用した場合の違いを認識させる。

なぜならば「I・IV・V は絵でいえば三原色のようなものであり、全部この和音だけで処理してしまうことは、絵の中の間色を全部原色に直してしまうのと同じで、大変に間違っていることなのである。主要三和音を、もし三原色とすれば、副三和音は柔かい間色ともいえよう。」⁶⁾ ということに副三和音としての II の機能は重要であり「属啓成氏の統計によれば、作曲作品中の 70~80 パーセントが II₆ (Sp₆) を導入したこのカデンツでできている」⁷⁾ ことからわかるように、非常に使用頻度の高い和音であるためである。

さらに進んだ学生に対しては、左手カデンツの開始位置を上記の基本形から転回形にして反復練習させることが望ましい。「同じ和音でも低音を変えると少し表

情が変わってくる」⁸⁾ ためである。(譜例5～6)

加えて、D和音の前にIの和音の第2転回形を用いることによって、さらに多くの楽曲に対応が可能となる。「バスの属音(V)の上に形成される第2転回位置のI(I²)は、しばしば基本位置のV(V₇)と合体して(I²V)として用いられる。この場合のI²は決して独立したT和音ではないから、分析に際して注意しなければならない。」⁹⁾、和音であるため、カデンツ反復練習の段階でI²Vの進行に慣れておくことが重要である。(譜例7)

II-2 具体的指導内容その2

任意の伴奏形による練習

カデンツの反復練習を一通り経験した後は、左手の和音を任意の伴奏形に変化させて練習させる必要がある。言葉の本来の意味におけるピアノ初心者にとっては、和音による伴奏にも困難を感じるであろうが、バイエル54番程度の能力があれば、練習次第で適切な伴奏付けが可能となる。(譜例8)

学生に対しては、ここまで例示したカデンツを参考に、前記調号3つまでの調性で反復練習を行なわせる。右手の動きについては特に指定せず、あくまでも参考例としての例示にとどめ、カデンツと調和した右手の動きを考えさせることによって、さらなる和声感の習得をめざす。また学生の予習を促すため、授業ごとに小テストを実施することはもちろん、その際学生のカデンツ演奏を詳細に検討し、問題点を指摘し、演奏方法、練習方法を助言することで、演奏している学

生自身にはもちろん、それを聴いている他の学生たちにも良い影響を与えようよう、授業担当者は常に配慮しなければならない。

II-2 具体的指導内容その3

楽曲分析

カデンツの反復練習と並行して行われるべき内容として、楽曲の分析とカデンツ構造の把握が挙げられる。歌唱指導の必要な教材については、伴奏部を伴う場合がほとんどのため、伴奏付けの際に和声学習におけるソプラノ課題の実習のような困難は存在しない。まず伴奏部を分析することにより楽曲構造を把握し、そのカデンツ構造を明確にする。(譜例9)その後、複雑な和音等はより簡単なものに置き換えることによって、反復練習で習得したカデンツをあてはめ、自分の能力に合わせた伴奏部を考えさせることにより、自身の能力に応じた伴奏付けが可能となる。

学生の能力によっては、最初から伴奏音形を考えて演奏することが困難な場合もある。その場合は伴奏部を和音のみにすることも考えられる。(譜例10～11)

II-2 具体的指導内容その4

任意の伴奏形について

旋律を伴奏する際の音形については、その形、リズムなど、さまざまな可能性が考えられるが、学生の音楽的能力を考慮した場合、次のような音形を例示すべきであろう。(譜例12) もちろん、練習の進んだ学生、高い能力を有する学生については、この限りではない。



譜例8 (開始和音第1転回位置による二長調の場合、右手の動き及び左手の伴奏形についてはあくまで参考として例示)

主人は冷たい土の中に

フォスター

♩ = 60

Soprano

I I¹ IV I² I² V₇

S

I I IV

S

I V V₇ I

10

S

10

IV I² V₇ I

13

S

13

IV I I VI V₇

16

S

16

V V₇ I I₇ V₇ IV V₇

19

S

19

I² V₇ I

譜例 9 教育芸術社出版「中学校の音楽 1」より「主人は冷たい土の中に」の和音分析

主人は冷たい土の中に

フォスター

♩ = 60

I IV² I V¹

I I IV² I

V¹ I IV²

I V¹₇ I IV² I

15

I V¹ I IV²

19

I V¹ I

譜例10 教育芸術社出版「中学校の音楽1」より「主人は冷たい土の中に」に反復練習で使
した和音による伴奏付けをほどこした場合

主人は冷たい土の中に

フォスター

$\text{♩} = 60$

I IV² I V¹

4

I I IV²

The image displays a musical score for piano accompaniment, consisting of five systems of music. Each system is written for a grand piano (treble and bass clefs) and includes chord symbols (I, V1, IV2, V1 7) and measure numbers (7, 10, 13, 16, 19). The score is a variation of the accompaniment from Example 10, where the accompaniment pattern is changed to a different rhythm.

System 1 (Measures 7-9):
 Treble: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4
 Bass: F2, G2, A2, B2, C3, D3, E3
 Chords: I, V1, I

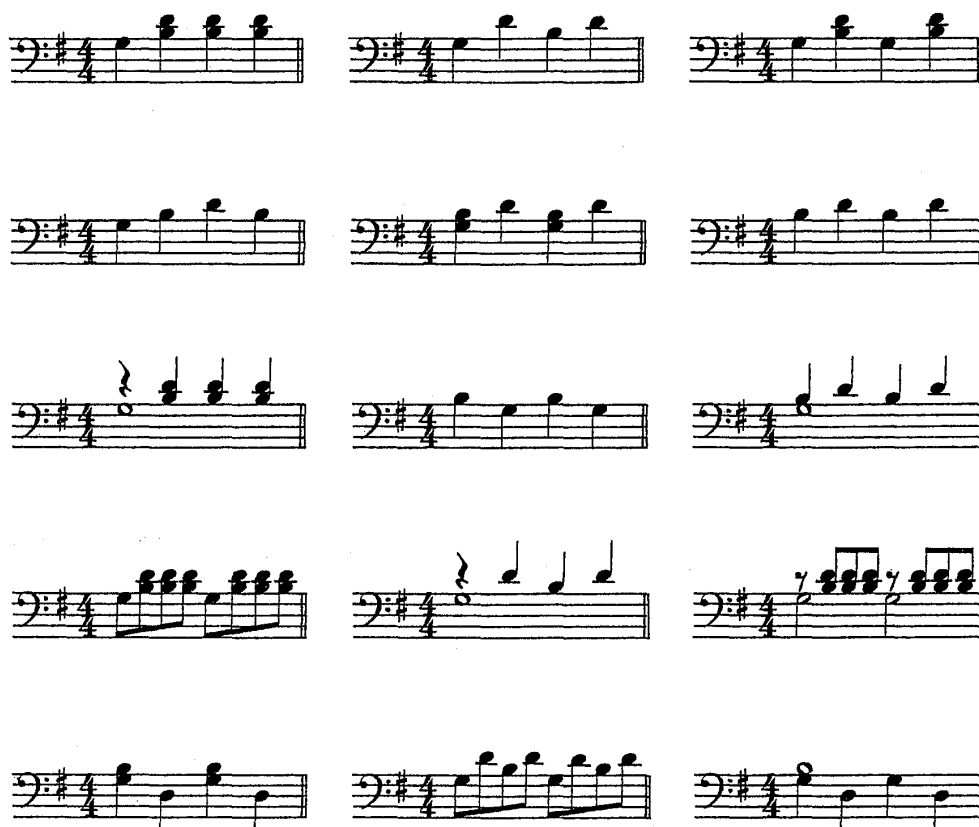
System 2 (Measures 10-12):
 Treble: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4
 Bass: F2, G2, A2, B2, C3, D3, E3
 Chords: IV2, I, V1 7, I

System 3 (Measures 13-15):
 Treble: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4
 Bass: F2, G2, A2, B2, C3, D3, E3
 Chords: IV2, I, I

System 4 (Measures 16-18):
 Treble: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4
 Bass: F2, G2, A2, B2, C3, D3, E3
 Chords: V1, I, IV2

System 5 (Measures 19-21):
 Treble: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4
 Bass: F2, G2, A2, B2, C3, D3, E3
 Chords: I, V1 7, I

譜例11 「譜例10」における伴奏和音を任意の伴奏形に変化させた場合（1例として）

譜例12 考えられるさまざまな伴奏形¹⁰⁾

Ⅲ 考 察

筆者は、広島文化短期大学音楽学科が地域総合科学科適格認定を受ける以前の平成10年度から平成14年度までの間、教職資格取得希望者のための伴奏法（科目名は年度によって「伴奏法」或いは「伴奏法 B」）を担当していたが、その折にもピアノ演奏、もしくは伴奏付けにおいて、非常に困難を感じている学生が多く存在した。伴奏法を担当した当初は、教職資格取得希望者のみが対象だったため、中学校で使用される音楽教科書の歌唱教材を用い、まず正確に伴奏部を演奏できるよう、さらに伴奏部を弾きながら旋律を歌唱できるように指導を行っていた。

やがて履修対象者が中学校教諭二種免許状（音楽）取得希望者の他に、幼稚園二種教諭免許状取得希望者や、音楽療法士2種資格取得希望者も含まれるようになり、中学校音楽教科書のみを使用した指導では不足であると考えたため、履修者の中にピアノ未経験者が散見されるようになったため、徐々に前述の指導方法に近い形での指導を行なうに至った。その結果、大

学入学以前に一度もピアノに触れた経験のない学生の教育実習、大学入学後にピアノレッスンを受け始めた学生の幼稚園実習等を、どうにか成功に導くことを得た。

伴奏法授業を進める上で、ピアノのレッスン経験の全くない学生、また音楽大学受験のためだけに短期集中でピアノレッスンを受けただけの学生に対し、どのような指導方法がより効果的であるかを追求し、試行錯誤を繰り返した結果前述の指導方法が導き出された。

もちろんこの指導方法をすべての学生に一律に適用することは難しく、伴奏法担当者が学生一人ひとりの進捗度に応じた方法を、絶えず試みなければならない。ピアノ初心者の中でも、その音楽的能力にはバラつきが見られるのであるから、カデンツの反復練習や任意の伴奏付けに対し、伴奏法授業担当者が適切な助言を行なってこそ、この小論で考察された指導方法が有効に作用し、また新たな指導方法についての可能性も見出しうるものとする。

IV 要 約

社会情勢変化と共に多様化した学習者ニーズがもたらした入学者の音楽的能力の著しい多様化によって、大学入学以前にピアノレッスンを経験しないという入学者も存在する状態を招いている。つまり、従来であれば音楽大学入学のために多少なりともピアノの訓練を経ているはず、という固定観念が通用しない状況となっている。

このように多様化した学生が教職を履修する場合、いわゆるピアノ初心者の学生が教育実習において最低限の歌唱指導を行えるよう、適切かつ効果的な伴奏法の指導が、従来とは違った観点から捉え直されなければならないと考える。

この小論は、限られた時間の中で、ピアノ初心者学生が教育実習における歌唱指導について、効果的に勉強するための方法を考察したものである。

謝 辞

英文を校閲してくださいました本学教授、堀江周三先生に、お礼申し上げます。

V 文 献

- 1) 小原光一，笹谷英一朗，高橋鐵雄，中村義朗，廣瀬鐵雄，水野久一郎：音楽科教員養成課程用 中

学校，高等学校音楽科教育法概説，55（1984），音楽教育研究協会，東京

- 2) 小原光一，笹谷英一朗，高橋鐵雄，中村義朗，廣瀬鐵雄，水野久一郎：音楽科教員養成課程用 中学校，高等学校音楽科教育法概説，56（1984），音楽教育研究協会，東京
- 3) 小原光一，笹谷英一朗，高橋鐵雄，中村義朗，廣瀬鐵雄，水野久一郎：音楽科教員養成課程用 中学校，高等学校音楽科教育法概説，92（1984），音楽教育研究協会，東京
- 4) 東京中田喜直：実用和声学，まえがき（1988），音楽之友社，東京
- 5) 中田喜直：実用和声学，23（1988），音楽之友社，東京
- 6) 中田喜直：実用和声学，33（1988），音楽之友社，東京
- 7) 安藤芳亮：和声と伴奏，101（1979），音楽之友社，東京
- 8) 中田喜直：実用和声学，9（1988），音楽之友社，東京
- 9) 島岡 譲：和声と楽式のアナリゼ，16（1979），音楽之友社，東京
- 10) 竹内 剛，岩間 稔：総合音楽講座（8）伴奏づけ，57（1978），（財）ヤマハ音楽振興会，東京

Summary

As a result of the changes in our society and learner's needs, a great diversity exists among students who enter a college. Hence, a student who never has experienced piano lessons can enter a college as music major these days. This means we cannot expect that the students of music major should have had some piano lessons before entering a college.

Knowing this kind of situation, students with poor piano performing skills should obtain a minimum skills and knowledge to guide singing in their practical teaching at school if they study for getting teaching licenses. To achieve this goal, it will be necessary for us to consider a better and more effective guiding method for teaching piano accompanying.

In this paper, the writer proposed an effective guiding method of teaching singing for the students with poor piano performing skills in a limited training time.

アンケート内容（平成18年度後期実施）

1, 大学入学以前にピアノを習っていたことがありますか？

- ・はい ・いいえ

2, (1で「はい」と答えた方) ピアノを始めたのは何歳ですか？

_____ 歳

3, (1で「はい」と答えた方) ピアノは何年間勉強しています（していました）か？途中で中断している場合は、実際にレッスンに通った合計年数を記入してください。

_____ 年

4, (1で「はい」と答えた方) ピアノレッスン以外に聴音や伴奏付け（ソルフェージュ）を習ったことがありますか？

- ・はい ・いいえ

5, (4で「はい」と答えた方) それは何年くらいですか？途中で中断している場合は、実際にレッスンに通った合計年数を記入してください。

_____ 年

6, (1で「いいえ」と答えた方) 大学入学後に主科または副科のピアノレッスンを履修していますか？

- ・はい ・いいえ

7, (主科もしくは副科ピアノレッスンを履修している人のみ) ピアノレッスン中に教職や音楽療法実習のための伴奏付けを勉強していますか？

- ・はい ・いいえ

以下は全員回答してください

8, ピアノは難しいですか？

- ・非常に難しい ・難しい ・普通 ・それほど難しくなく ・易しい

9, (主科もしくは副科ピアノレッスンを履修している人、または個人レッスンに通っている人) 現在勉強中の曲を記入してください。

(例：チェルニー30番, ソナチネ, モーツァルトのソナタ, ショパンのワルツ等)

10, あなたは教職資格取得、もしくは音楽療法士資格取得を希望していますか？

- ・はい (_____ 資格, 両方の場合も記入してください) ・いいえ

11, 簡単なメロディであれば適当に伴奏をつけられますか？

- ・簡単にできる
・少し練習すればできる
・良く練習すればなんとかできる
・思うようにできない
・どうしたらよいかまったくわからない